

『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語の語彙的特徴

斯欽巴図*

Lexical Characteristics of Mongolian Text in “Sanhe-Yulu”,
Transcribed in Manchu Script at the Beginning of 19th Century

SECHINBAT

要旨

本稿の目的は、『三合語録』のモンゴル語が満洲語の口語会話学習書『tanggū meyen (一百条)』のオイラート文語訳の満洲文字表記であることを、語彙の面から論証し、19世紀初頭のオイラート文語・オイラート方言の貴重な資料として位置付けることである。102話 (= 条) からなる『三合語録』の序文に、その満洲文字表記モンゴル語は口語の記録であることが記され、従来のモンゴル語の研究・論考においても、近代モンゴル語の希少な資料の一つとして取り上げられてきたが、その言語学的特徴はほとんど明らかにされていなかった。最近、筆者が『三合語録』のモンゴル語の研究を進める際に、『tanggū meyen(一百条)』の7話のオイラート文語訳を見ることができた。興味深いのは、両者のテキストを比較し、表記や文法的特徴を究明することによって、『三合語録』の最初の7話のモンゴル語は同オイラート文語訳の満洲文字表記であることがわかった。しかし、それらの対応は、『三合語録』の7話に過ぎず、全102話のモンゴル語の言語学的特徴を明らかにする必要がある。ここで、モンゴル文語との比較、各種文典・辞書の記載に基づき、同書のモンゴル語の語彙的特徴はオイラート文語やオイラート方言に特徴的な語彙が多く含まれることであり、それも全巻にわたって一貫しているという結論に至った。

キーワード：『三合語録』、モンゴル語、満洲文字、オイラート文語、方言

Keywords : Sanhe-Yulu, Mongolian, Manchu script, Written Oirat, Dialect

目次

1. はじめに
2. 諸テキストと文典・辞書について
 - 2.1. テキストとローマ字転写方式
 - 2.2. 文典・辞書とその表記
3. 『三合語録』のモンゴル語におけるオイラート方言の語彙
 - 3.1. 語形がモンゴル文語にあるものの意味が異なる語彙
 - 3.2. 語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙
 - 3.3. 語形がモンゴル文語にない語彙
4. おわりに

* 東北大学東北アジア研究センター

1. はじめに

清朝の乾隆時代に編纂された満洲語の口語会話学習書『tanggū meyen (一百条)』には4種類のモンゴル語訳が存在し、それぞれ『初学指南』と『三合語録』における102話(=条、以下同様)の満洲文字表記モンゴル語訳、『蒙古托忒彙集』に収録されている7話のオイラート文語訳(以下、「トド文字一百条」とする)、そして『monggo ubaliyambuha tanggū meyen (蒙古翻譯一百条)』(以下、『蒙古翻譯一百条』とする)の101話のモンゴル文語訳である(注1)。これらのうち、本稿で取りあげる『三合語録』は、満洲語と満洲文字表記モンゴル語、そして白話体漢語が三言語対訳の形で並べられたモンゴル口語の会話学習書であり、102話・305丁(710頁)からなっている。同書は、富俊の撰によるものであるが、その「序」に、御前行走正紅旗満洲副都統巴林輔国公額駙德勒克(デレク)がモンゴル口語の発音に直したと記載されている(注2)。

『三合語録』のモンゴル語に関しては、モンゴル語の「口語」を表すために作られたこと(注3)、また、当時の書き言葉として用いられていたモンゴル文語でなく、満洲文字によって表記されていること(注4)の二つの特色がある。しかし、「序」にはモンゴル語の口語を表しているとして記されているが、その「口語」とは一体どのようなものだったのか、その基礎となる方言の実態は何か、現代モンゴル語のどこの方言に関連しているかは必ずしも明記されているわけではない。

一方、『三合語録』のモンゴル語は、従来のモンゴル語の研究・論考において、近代モンゴル語の希少な資料の一つとして取りあげられてきたが(注5)、その言語学的特徴はほとんど明らかにされていない。したがって、『三合語録』のモンゴル語はどのような特徴をもっているか、現代のどこの方言に関連するかといったその「口語」の実態を明かにすることは、モンゴル語の時代的・地域的研究において大きな意義がある。

こうした問題を中心に、斯欽巴図・栗林[2008]と、それに基づいて掲載した栗林・斯欽巴図[2009b]では、『tanggū meyen (一百条)』の4種類のモンゴル語訳文の間でテキストの比較、具体的には『tanggū meyen (一百条)』の第3話の一部分にあたる各テキスト間の比較を行い、それらの相互関係を示した。即ち、語形や文法的語尾の表記、使われている語句の対応によって、『三合語録』のモンゴル語は「トド文字一百条」のオイラート文語をそのまま忠実に満洲文字で表記しようとしたものであるが、『初学指南』のモンゴル語は「トド文字一百条」のオイラート文語を満洲文字で表記しながらそのオイラート文語に特徴的な部分を書き換えているという三者の極めて緊密な関係を指摘した。それに対して、『蒙古翻譯一百条』のモンゴル語は、他の3種類のテキストとは別に独自に行なわれた『tanggū meyen (一百条)』のモンゴル文語訳であると見なした。また、栗林・斯欽巴図[2009a]において、「トド文字一百条」のモンゴル語にローマ字転写と日本語訳を付し、それは典型的なオイラート文語の特徴をもっていることを明らかにした。その上、栗林・斯欽巴図[2010]では、「トド文字一百条」の全文とそれにあたる『三合語録』の最初の7話のテキストを全面的に比較し、文字と表記の対応から、『三合語録』のモンゴル語は「トド文字一百条」のオイラート文語をそのまま満洲文字で表記した事実をより具体的に論証

した。

上掲の発表や論文の検証によって、『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語の「口語」の実態は、オイラート方言に基づくオイラート文語であると見なすことができる。これは、単なる「トド文字一百条」と対応している最初の7話ではなく、それ以降の部分も語彙、語形や語尾の表記が一貫していることから、『三合語録』の全102話のモンゴル語の特徴であると考えられる。一方、こうした論考では、語形や語尾の表記、文字、語句の対応に注目したが、語彙の面からの検討は少なく、斯欽巴図・栗林[2008]において、幾つかのオイラート方言に特徴的な語彙を示すことにとどまった。

筆者は、『三合語録』のモンゴル語における語形と意味の面でモンゴル文語と異なるもの、また語形と意味が不明の語彙や語句を約130語ピックアップし、それらについて検討を行った。その結果、ほとんどの語形、語彙や語句をカルムイク・オイラート方言の辞書やオイラート文語の文典で確認することができ、斯欽巴図[2010]において『三合語録』のモンゴル語の言語的特徴の一つとしてまとめた。最初は、モンゴル文語と異なる語彙に方言の語彙が含まれている可能性を想定し、『三合語録』のモンゴル語は「口語」を表しているという見地からその基礎となる方言の要素を探ることを目指していた。そして、「トド文字一百条」の発見に伴い、『三合語録』の最初の7話のモンゴル語はそのオイラート文語の満洲文字表記であることが明らかになり、より確かさをもってカルムイク・オイラート方言の辞書やオイラート文語の文典に注目して考察を進めたものである。

ここで、斯欽巴図[2010]でまとめた『三合語録』のモンゴル語におけるオイラート方言やオイラート文語に特徴的な語彙の一部を取りあげ、カルムイク・オイラート方言の辞書やオイラート文語の文典によって、それらの使われている具体的な意味と語形について検討する。その際、『蒙古翻譯一百条』のモンゴル語を『tanggū meyen (一百条)』のモンゴル文語訳と見なして対応する語彙を示し、本稿で基準にする《蒙汉词典》[1999]のモンゴル文語と明らかに異なるものについては説明を加える。また、『三合語録』のモンゴル語と同じくオイラート文語の満洲文字表記であるが、その特徴的な部分を書き換えたと見られる『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語を参考にする(注6)。これは、いずれも『三合語録』のモンゴル語の方言の特徴を明確に示すためである。

本稿の目的は、上述の先行研究における『三合語録』のモンゴル語は『tanggū meyen (一百条)』のオイラート文語訳の満洲文字表記である」という見解を、語彙の面からいっそう論証することである。それと同時に、『三合語録』のモンゴル語の語彙的特徴を明らかにすることで、当時のオイラート文語やオイラート方言の語彙の研究の一助にしたい。

2. 諸テキストと文典・辞書について

2.1. テキストとローマ字転写方式

本稿で引用する各テキストの満洲語、満洲文字表記モンゴル語、モンゴル文語、オイラート文語に関しては、基本的に元の字形を再現せず、ローマ字転写方式を用いる。

『三合語録』のモンゴル語の底本として、東京外国語大学附属図書館所蔵の道光二十六（1846）年重鐫を利用する。同書の版本として、北京で出版された、道光十（1830）年の五雲堂本と道光二十六（1846）年の炳蔚堂本の2種類あるが、いずれも道光九（1829）年の「序」をもつ木版本で、両者の形式も内容も全く同じである。本稿で利用可能なテキストのうち、東洋文庫所蔵道光十（1830）年新鐫『三合語録』の漢語訳の所々に書き換えられた部分がある。したがって、モンゴル語の意味に関するテキストの元の状態を保つために、道光二十六年重鐫を用いた。

『三合語録』の満洲語と満洲文字表記モンゴル語の引用する部分は、いずれも Möllendorff [1892] 方式によるローマ字転写で示す。その中、満洲文字表記モンゴル語に限って、次のような補助記号を付した：

- 「=」（イコール）：動詞語幹と活用語尾との境界。語幹と語尾の間に接合母音がある場合は、「=」（イコール）を二つ使い、母音の前と後に付した。動詞が語幹のまま現れている場合は、語幹末に「=」（イコール）を付した。
- 「-」（ハイフン）：名詞類の語幹と分綴される曲用語尾との境界。
- 「+」（プラス）：名詞類の語幹と連続される曲用語尾との境界。
- 「!」（感嘆符）：「原文のまま」の意味。意味や表記の不明な箇所を示す。

出現位置は、底本の丁（裏 =a / 表 =b）、行で示す。例えば、kimda(20b2) は、この単語が『三合語録』の第 20 丁の裏 2 行目に現れることを意味する。

『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語のテキストとして、中国第一歴史檔案館所蔵本（写本、4 冊）を利用する。『蒙古翻訳一百条』のモンゴル語の所々に書き換え、または書き入れている字句が見られる。引用する際にそれをカッコ「()」内に示した。ローマ字転写は、栗林・呼日勒巴特尔 [2006] の方式によるが、用いる補助記号の意味は『三合語録』のモンゴル語と同様である。

『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語のテキストとして、東洋文庫所蔵本（木版本、2 巻）を利用するが、ローマ字転写方式や補助記号は『三合語録』のモンゴル語と同様である。

「トド文字一百条」のモンゴル語を引用する場合、北京大学図書館所蔵青写真複製本『蒙古托忒彙集』（写本、8 冊）を用いる。オイラート文語のローマ字転写方式は、サンボードルジ・橋本 [2005] によるが、補助記号の意味は『三合語録』のモンゴル語と同様である。

2.2. 文典・辞書とその表記

モンゴル文語については、『蒙汉词典』[1999] に収録されているモンゴル文語を基準にしたものであるが、適宜に『五体清文鑑』[1957]、『蒙古语辞典』[1997]、『Цэвэл』[1966] のモンゴル語を参考にする。引用する部分のローマ字転写は、栗林・呼日勒巴特尔 [2006] 方式によるもので、元の辞典の転写方式と異なる場合がある。

オイラート文語について、Лувсанбалдан [1975]、八省区蒙古语文工作协作小组《蒙文和托忒蒙文》编写组编 [1976]（以下、『蒙文和托忒蒙文』[1976] とする）、サンボードルジ・橋本 [2005]、确精扎布 [2008] を参照する。カルムイク・オイラート方言に関しては、乌恩奇・艾仁才 [2005]、Ramstedt [1935]、确精扎布・格日勒图 [1998]、Krueger [1978-1984]、白音门德 [2010]、Котвичь [1905] に基づく。こうした文典・辞書を引用する場合、ローマ字転写や音声表記は基本的に原典の字体を用い、音声表記を「[]」（カギカッコ）、中国語による意味を「〈〉」に入れて示した。但し、Ramstedt [1935] における長母音の表記は、母音字の上にマクロン「-」（横棒）を付けているが、便宜上その代わりに国際音声記号の長音符「:」を用いた。

『三合語録』の満洲語の意味は、田村・今西・佐藤 [1966-1968]、Лувсанжав, Шархүү [1968] による。

3. 『三合語録』のモンゴル語におけるオイラート方言の語彙

『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語におけるモンゴル文語と異なる語彙や語句を、語形と意味の特徴によって、

- 1) 語形がモンゴル文語にあるものの意味が異なる語彙
- 2) 語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙
- 3) 語形がモンゴル文語にない語彙

といった三つに分けることができる。本稿では、こうした語彙のうち、典型的な例をそれぞれ 10 語ずつ取り上げ、各種文典・辞書によってそれらの方言の特徴を考察する。

検討する際に、当該語彙を各項目の冒頭に取り上げ、直後に出現位置を付す。それに続いて、対応している

『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語 (= M)、

『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語 (= S)

を対照し、その下に『三合語録』の文脈を示した。文脈における略語は、以下のとおりである（当該語彙の対応する部分を下線で示した）。

「満」= 『三合語録』の満洲語

「訳」= 日本語訳

「漢」= 『三合語録』の漢語

「蒙」=『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語

3.1. 語形がモンゴル文語にあるものの意味が異なる語彙

(1) *cuk*(3a2) : *M* čöm 「すべて」 . *S* *cuk* ~ *cum* 「すべて」

満 *gemu* age i kesi kai
 訳 すべて兄上の恩だぞ
 漢 〈皆是阿哥的恩惠呀〉
 蒙 *cuk* abagai-yen kesik bisio

cuk 「すべて」に対応しているモンゴル文語形は、*čuy* 〈一起，一同，一齐，一块儿〉「一緒に」(《蒙汉词典》[1999:1285])であるが、単語の意味が異なる。それに対して、*cuk* 「すべて」の語形も意味も、オイラート文語の *čuq* 〈都〉「すべて」(《蒙文和托忒蒙文》[1976:173])と一致している。したがって、『三合語録』の *cuk* はオイラート方言の語彙と考えられる。

『初学指南』のモンゴル語の満洲文字表記も *cuk* 「すべて」になっている。しかし、次に見る「語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙」(1)に取りあげた『三合語録』の *cuk haran ot=nai* 「すべてどこへ行っているか」における *cuk* 「すべて」に対して、『初学指南』には *cum* 「すべて」とある。これは、モンゴル文語 *čöm* 〈全，皆，都...〉「すべて」(《蒙汉词典》[1999:1290])に対応した表記である。

(2) *kimda*(20b2) : *M* kilbar 「容易だ」 . *S* *kimda* 「簡単だ」

満 *ubaliyambure be tacici nokai ja*
 訳 翻訳を学ぶならば甚だ容易だ
 漢 〈若學繙譯很容易〉
 蒙 *orciol=ho+igi sur=bele tong kimda* baha

kimda 「容易」と同じ語形をもつモンゴル文語は、*kimda* 〈便宜的，賤价的...〉「安い」(《蒙汉词典》[1999:630])であり、両者の意味が異なる。それに対して、カルムイク・オイラート方言の [*kimdʰ*, *kimdə*] には、*billig* 「安い」と *leicht* 「簡単な」(Ramstedt [1935:231])との二つの意味があり、*kimda* 「容易」は二番目の *leicht* 「簡単な」と一致している。ここから、『三合語録』の *kimda* は、カルムイク・オイラート語の語彙として用いられていることが分かる。

『初学指南』では同じくカルムイク・オイラート方言の *kimda* 「容易」が対応し、『蒙古翻訳一百条』ではモンゴル文語の *kilbar* 「容易だ」(《蒙汉词典》[1999:632])が対応している。

(3) *dam*(28b2) : *M* barimta 「頼り所」 . *S* *dam* 「巧みさ」

満 *fakjin* bahara de mangga
 訳 巧みさを得るのが難しい
 漢 〈訣竅難得〉
 蒙 *dam*[*tam!*] (注7) *ol=hū-du keceo baha*

dam 「巧みさ」に対応しているモンゴル文語形は、*dam* 〈①間接的... ②担着的〉「①間接的な... ②担う」(《蒙汉词典》[1999:1145])であるが、意味が異なる。それに対して、オイラート方言の語彙には、*dam*[*dam*] 〈技巧，经验〉「巧みさ，経験」(乌恩奇・艾仁才 [2005:232])とあり、語形と意味が *dam* 「巧みさ」と合致している。

また、『初学指南』でも、*dam* 「巧みさ」が対応していることから、『三合語録』の [*tam!*] は、オイラート方言の *dam* に対応した表記であるが、満洲文字表記 *dam* の補助記号 (<d>の右傍らの点)が脱落したものと考えられる。『蒙古翻訳一百条』では、満洲語 *fakjin* 「頼り所」の直訳である *barimta* が対応している。

(4) *tord=u=n*(64a2) : *M* *toruɣda=γad* (注8) 「縛られて」 . *S* *tord=at* 「縛られて」

満 *siderebu nakū* fuhali šolo bahakū
 訳 用事に縛られ竟に暇がなかった
 漢 〈被事絆住 竟没得工夫〉
 蒙 *kerek-tu tord=u=n tung ese ooljaba*

tord=u=n 「縛られ」に対応しているモンゴル文語には、*tourdaqu* [*tɔrdɔx*] 〈下网，张网，布网〉「網を張る」(《蒙汉词典》[1999:1053])と、*tordaqu* [*tɔrdɔx*] 〈①养活，照护，照料；②维修，拾掇〉「①世話する、面倒をみる、②修理する」(同 [1999:1080])との二つの語形が見出されるが、いずれも例文の文脈に合わない。

一方、カルムイク・オイラート方言の語彙には、[*tordʰxɔ*] *festsitzen*, *fest bleiben* 「しっかりと固定される」(Ramstedt [1935:401])とあり、その語形と意味が *tord=u=n* 「縛られ」とほぼ一致している。また、白音门德 [2010:216]にも、[*tɔrda-*]「遮る、阻む」というオイラート方言の語彙が記されている。ここから、この語は「(用事に)縛られ」の意味をもつカルムイク・オイラート方言の語彙と考えられる。

『初学指南』では同じ語幹に継続の副動詞語尾が付いた *tord=at* 「縛られて」が対応し、『蒙古翻訳一百条』では *toruɣda=γad* 「縛られて」が対応している。

(5) *gai garga=baci*(110a1) : *M* *orubasu* 「憑きものを祓えば」 . *S* *gai garga=baci*

満 *samdaci mekele fudešeci* baitakū
 訳 薩満踊りをしても無駄で(巫人が跳ね神によって)憑きものを祓っても無用だ

漢〈跳神送崇都不中用〉

蒙 bule=becu talar gai garga=baci kerege ugei

gai garga=baci の単語ごとに対応しているモンゴル文語は、それぞれ *γai* 「災い」(《蒙漢詞典》[1999: 732]) と *γarγa=baču* 「出しても」(同 [1999: 752]) であるが、複合語としてモンゴル文語に存在しない。

それに対して、カルムイク・オイラート方言の語彙には、[gä: ɣarγoxo] *das unglück (durch besondere zeremonien) abwenden od, verbannen* 「特別な儀式によって不幸を回避する、あるいは追い払う」(Ramstedt [1935: 149]) とあり、語形と意味が gai garga=baci と一致している。これに関連して、出典が不明であるものの、『蒙古語大辞典』[1933: 731] には *γai-du γarγaysan kümün* (注 9) 「富貴ナ人ノ身代ニナツテ其ノ衣服ヲ纏ヒ病氣快癒災難除去ヲ祈ル人」とある。

『蒙古翻訳一百条』では *oru=basu* とあり(《五体清文鑑》[1957: 2.1672-2] における満洲語 *fudešembi* に対応するモンゴル語は *orumui*)、その傍らに *γai γarγa=basu* と書き換えている。これは『蒙古翻訳一百条』の成立に関わる問題であるが、ここでは他の文献を参考にして書き換えた可能性を指摘しておきたい。

(6) *šalik*(139b1) : *M sinu=ju* 「耽溺し」. *S šalik*

満 *yumpi dosihabi*

訳 耽溺した

漢〈深進去了〉

蒙 šalik bol=ji

文脈からみると、šalik は酒飲みのことを指しており、「愚かになった」、あるいは「だらしなくなった」という意味で使われている。これに対応しているモンゴル文語形は、*šaliγ* 〈淫蕩的, 淫乱的...〉「淫蕩な、みだらな...」(《蒙漢詞典》[1999: 976]) であるが、その意味が文脈に合わない。

カルムイク・オイラート方言の語彙には、[šälic] *albern, ohne ernst, liederlich, leichtsinnig; leichtsinn; faulenzend* 「愚かな、だらしない、軽率な、怠り」(Ramstedt [1935: 354]) とあり、その語形と意味が『三合語録』の šalik と一致している。

『初学指南』では同じく šalik が対応しているが、『蒙古翻訳一百条』では満洲語の逐語訳 *sinu=ju(durasin) oru=juqui* 「耽溺した」が対応している。

(7) *adak+tan*(160a3) : *M egenegte* 「結局」. *S adak+dan* 「結局」

満 naranggi girucun tuwabuhabi

訳 結局羞恥を見させた

漢〈到底受了羞辱了〉

蒙 adak+tan iciguori ujekde=be

adak+tan に対応しているモンゴル文語形は、*aday-tayan* (起码, 至少, 最低限度) 「少なくとも、最低限」(《蒙漢詞典》[1999: 70]) であるが、その意味は上掲の文脈に合わない。オイラート方言の語彙には *agaqtän* 〈最終、最後〉「結局、最後に」(乌恩奇・艾仁才 [2005: 14]) とあり、語形と意味が adak+tan と一致している。つまり、『三合語録』における adak+tan は「結局」の意味を持つオイラート方言の語彙である。

『初学指南』では、語尾の一番目の子音字の表記が異なるものの、基本的に同じ語形 *adak+dan* が対応している。『蒙古翻訳一百条』では、モンゴル文語にみる *egenegte* 「結局」が対応している。

また、『三合語録』の第 66 話には、*ci adak+tan jadarool=ba*(196a1) (*si naranggi firgembuhebi* 〈你到底洩露了〉) 「あなたは結局漏らした」という事例がある。

(8) *urni=ji*(184a3) : *M čiquldayda=ju* 「追い詰められて」. *S urni=ji*

満 *ini gisun de hafirabufi*

訳 彼の話に追い詰められ

漢〈被他的话逼着〉

蒙 *teon+i uge-du urni=ji*

モンゴル文語には *örnükü* [ornox] 〈开展, 发展...〉「栄えて、盛んで...」(《蒙漢詞典》[1999: 294]) とあり、語形が『三合語録』の urni=ji と一致するものと見られるが、その意味が上掲の文脈に合わない。それに対して、オイラート方言の語彙では、*ürnekü* [yrnek] 〈生气〉「腹が立つ、怒る」(乌恩奇・齐・艾仁才 [2005: 63]) とあり、語形と意味がほぼ一致していることから、urni=ji はオイラート方言の語彙と考えられる。つまり、例文におけるモンゴル語の意味は「彼の話に腹が立って」である。

『初学指南』では同じ表記が対応しているが、『蒙古翻訳一百条』では満洲語の直訳である *čiquldayda=ju* 「追い詰められて」が対応している。

(9) *sineken*(231b2) : *M sayi* 「たった今」. *S sai* 「たった今」

満 *gerhen mukiyetele teni genehe*

訳 夕暮れになってたった今行った

漢〈到了黄昏时候方纔去了〉

蒙 *hab haranggoi bol=o=mai sineken hari=ji ot=ba*

sineken と同じ語形をもつモンゴル文語 *sineken* の意味は〈略新的, 较新的〉「割合新しい」(《蒙漢詞典》[1999: 900]) であるが、例文の文脈の意味と異なる。それに対して、

烏恩奇・艾仁オ [2005:199] には *šineken* [ʃinken] 〈刚刚, 刚才〉「たった今」とあり、*šineken* はオイラート方言の語彙であると見られる。例文のモンゴル語の意味は「真っ暗になってたった今帰って行った」であり、満洲語の意識になっている。

『初学指南』には、*sai* とあり、『蒙古翻譯一百条』にみるモンゴル文語の *sayi* 「たった今」に対応している表記と考えられる。これは、オイラート方言の *šineken* とモンゴル文語の *sineken* の意味が明らかに異なっているため、オイラート文語を満洲文字で表記する際に書き換えられたものとみなすことができる。

(10) *ori=ksen okin+asu uku ide=nem* (272b1) : *M* *güičegsen anu aldaγulbai. ese urumdayсан anu jiči qarın ögtebei* 「追いかけたものが取り落とされた。狩りをしてないものがまた却って手に入った」. *S* *ürisen ükin üku idenem* 「招いた娘が脂身を食べる」

満 *amcahangge fuhali turibuhe. murakūngge be elemangga nambuhabi*
 訳 追いかけたものが竟に取り落とされた。狩りをしてないものが却って手に入った。
 漢 〈趕的竟脫了 沒影兒的倒撞着了〉
 蒙 *ori=ksen okin+asu uku ide=nem ge=ji. sana=san ugei yuma harin uristu=ba*

ori=ksen okin+asu uku ide=nem に対応するモンゴル文語形 *uriγsan ökin-eče ögekü idenem* の逐語訳は「招いた娘から脂身を食べる」となるが、モンゴル文語における熟語としての意味が明らかではない。これに関連して、『蒙古托忒彙集』には、「トド文字一百条」の前、「トド文字字母表」の直後に *üri=qsen okin+āsu ökü ide=nem ge=kü üliger* 「招いた娘から脂身を食べるという物語」というトド文字で書かれた字句があり、*ori=ksen okin+asu uku ide=nem* という熟語は、それに対応した満洲文字表記であり、物語の題名、またはことわざであることが窺える。

烏恩奇・艾仁オ [2005:120] では、*küüke urixu* [ky:k yryx] 〈宴请待嫁姑娘〉「嫁に行く娘を招宴する」というオイラート方言の熟語がある。また、苏雅拉 [2009:51] にも、「結婚式の前に嫁に行く娘を彼女の親戚が招宴することをオイラートでは広く *keüken uriqu* [yrex] (娘を招く) と言う」とある。よって、*ori=ksen okin+asu uku ide=nem* の前半である *ori=ksen okin+asu* は、これに対応しているオイラート方言の結婚習慣に関する言葉であるとみなされる。その意味は「招宴した(嫁に行く)娘から」となる。

また、Котвичъ [1905:67] には、*kō+giyin öyirö kō, ököñ+ei öyirö ököñ* 「すすの近くにすす、脂身の近くに脂身」ということわざがある。ここから、「黒いもの、悪いもの」を例える *kō* 「すす」に対して、オイラート方言では「白いもの、良いもの」を *ököñ* 「脂身」で例えて言うことがわかる。つまり、*ori=ksen okin+asu uku ide=nem* の後半である *uku ide=nem* は、「美味しいものを食べる」、或いは「良いものを貰う」という意味である。

したがって、この熟語は、おおよそ「嫁に行く娘を招宴したが、かえって美味しいものを食べさせた(良いものを貰った)」という意味のオイラート方言のことわざと考えられる。上掲の例文において、モンゴル語の *ori=ksen okin+asu uku ide=nem ge=ji* は、満洲語の全体の意味に対応しているが、*sana=san ugei yuma harin uristu=ba* 「思ってもなかったものがかえって得られた」は、満洲語の後半である *murakūngge be elemangga nambuhabi* 「狩りをしてないものが却って手に入った」に対応していることがわかる。

『蒙古翻譯一百条』の *güiče=gsen anu aldaγul=bai. ese urunda=γsan anu jiči qarın ögte=bei* 「追いかけたものが取り落とされた。狩りをしてないものがまた却って手に入った」は、ほぼ満洲語の逐語訳になっている。一方、『初学指南』には、*ürisen ükin üku idenem* 「招いた娘が脂身を食べる」とあるが、これは、おそらく *ükin* に付く奪格語尾が脱落したことによる誤記であると考えられる。

3.2. 語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙

(1) *hama* (4b1) : *M* *yaγun* 「何」. *S* *ha* 「どこ」

満 *aibi*
 訳 何がある(か)
 漢 〈那裡〉
 蒙 *hama bai=nai*

オイラート方言の語彙には、*[xama:]xamā* 〈哪儿, 哪里, 何处〉「どこ」(确精扎布・格日勒图 [1998:92]) とあり、*hama* はそれに対応した満洲文字表記と考えられる。この部分の直訳は「どこにあるか」となるが、文脈から見れば「どういたしまして、とんでもない」といった謙虚の意味を表している。

これに対応するモンゴル文語形は *qamiγ_a[xa: ~ xa:n]* (《蒙汉词典》[1999:557]) であり、『初学指南』の *ha* 「どこ」はその発音表記に対応している。『蒙古翻譯一百条』には *yaγun bui* 「何がある(か)」とある。

また、これに関連する *haran* という語彙があり、例文は次の通りである。

haran (14a1) : *M* *qamiγ_a* 「どこへ」. *S* *ha* 「どこへ」
 満 *gemu aibide genembi*
 訳 すべてどこへ行っているか
 漢 〈都是往那裡去〉
 蒙 *cuk haran ot=nai*

オイラート方言の語彙には、*xārān[xa:ra:n]* 〈往哪儿〉「どこへ」(烏恩奇・艾仁オ [2005:

88])とあり、haran はそれに対応している満洲文字表記と見られる。

これに対応するモンゴル文語形は qamiy_a[xa: ~ xa:n] ~ qamiyasi-ban [xa:fa:n] (《蒙漢詞典》[1999: 557, 558]) である。

(2) yaga=ji(5b2) : *M* kerki=n 「如何に」 . *S* ya=ji 「どうして」

満 adarame mimbe gisure sembi

訳 どうして私を言えというか

漢 〈叫我怎樣說呢〉

蒙 nama+igi yaga=ji kele= ge=nei

オイラート方言の語彙には、[jaca-]yaya-〈做什么,干什么;怎么样〉「何をするか;どうして」(确精扎布・格日勒图 [1998: 282])とあり、『三合語録』の yaga=ji はそれに副動詞語尾 -ji が付いた形に対応した表記と見られる。

これに対応するモンゴル文語形は yaḡakiḡu [ja:dʒ] (《蒙漢詞典》[1999: 1383]) であり、『初学指南』の ya=ji 「どうして」はその発音表記に対応している。『蒙古翻譯一百条』には kerki=n 「如何に」とある。

(3) kumu(27b2) : *M* kümün 「人」 . *S* kun 「人」

満 niyalma takūrafi imbe okdonobuki seci

訳 人を遣って彼を迎えに行かせようと言うが

漢 〈要差人迎他去〉

蒙 kumu jaru=ji teon+iigi uktul=u=ya ge=becu

オイラート方言の語彙には、[kym] ~ [kymyn] 〈人〉「人」(确精扎布・格日勒图 [1998: 124])とあり、『三合語録』の kumu は [kym] に対応した表記と考えられる。『三合語録』では、この語形が語幹のままで9回、格語尾がついた形で8回現れている。

これに対応するモンゴル文語形は kömün ~ kümün [xun] (《蒙漢詞典》[1999: 705]) であり、『初学指南』の kun はその発音表記に近い表記になっている。『蒙古翻譯一百条』には kümün 「人」とある。

(4) cigi(34a2) : *M* basaču 「また」 . *S* c'i 「また」

満 cai inu omihakū

訳 お茶も飲まなかった

漢 〈茶也沒喝〉

蒙 cai cigi oo=ksen ugei

オイラート文語には、*čigi* : also, too, moreover, even 「また、その上、さえ」(Krueger [1984: 637])とある。『三合語録』の cigi はこれに対応している表記であり、例文のモンゴル語の意味は「お茶も飲まなかった」である。

これに対応するモンゴル文語形は ču [tʃ] (《蒙漢詞典》[1999: 1281]) であり、『初学指南』では、c'i と表記されている。

(5) singgi(51a1) : *M* adali 「同じ」 . *S* adali 「同じ」

満 uthai gala bethe emke bijaha adali

訳 即ち手足の一本が折れたようだ

漢 〈就像手足折了一隻一樣〉

蒙 mun gar kul nige hūgūra=ksan singgi

オイラート方言の語彙には、šinggi [ʃiŋg] 〈好像, 犹如〉「~ような」(乌恩奇・艾仁才 [2005: 199])とあり、文脈から、singgi はそれに対応した満洲文字表記と考えられる。これに対応するモンゴル文語形は siy ~ sig [ʃiŋ] (《蒙漢詞典》[1999: 911]) である。

『蒙古翻譯一百条』には adali 「同じ」とあり、『初学指南』の adali はモンゴル文語の adali に対応した満洲文字表記になっている。

(6) sahana(61b2) : *M* mönüken 「たった今」 . *S* munuken 「たった今」

満 jakan jifi

訳 たった今来て

漢 〈方纔來〉

蒙 sahana ire=ji

オイラート文語には、*sāxana* : recently, lately 「最近、たった今」(Krueger [1984: 386])とあり、文脈から『三合語録』の sahana はそれに対応している表記と考えられる。この単語は、ほかにも3回(182a3, 218b2, 228a1)現われるが、すべて同じ意味で用いられている。これに対応するモンゴル文語形は sayiqan [sajxan] (《蒙漢詞典》[1999: 875]) である。

『蒙古翻譯一百条』には mönüken(sayi tuḡar) ireḡü 「たった今来て」とあり、『初学指南』の munuken はモンゴル文語の mönüken に対応した満洲文字表記になっている。

(7) manggadur(246b2) : *M* marḡata 「明日」 . *S* margata 「明日」

満 bi cimari farhūn suwaliyame genefi

訳 私は明日暗闇まじりの頃に行って

漢 〈我明日黑早去〉

蒙 bi manggadur hab haranggoi-gar ot=ji

オイラート方言の語彙には、mangγadur [mangɣdar] 〈明天〉「明日」(烏恩奇・艾仁才 [2005: 165]) とあり、『三合語録』の manggadur はそれに対応している表記と見られる。

『蒙古翻訳一百条』では、marḡata 「明日」が対応している。『初学指南』には、margata 「明日」とあり、モンゴル文語の満洲文字表記になっている。

(8) turgun(262b3) : M törküm 「実家」. S turkum 「実家」

満 dancan i ergi

訳 実家の方

漢 〈娘家〉

蒙 turgun ulus

オイラート方言の語彙には、törkün [tɔrkyn] (注 10) 〈娘家〉「実家、里方」(烏恩奇・艾仁才 [2005: 227]) とあり、『三合語録』の turgun はそれに対応した表記と考えられる。

『蒙古翻訳一百条』では törküm 「実家」とあり、『初学指南』の turkum はモンゴル文語の満洲文字表記とみなすことができる。

(9) cece(263a3) : S cecek 「疱瘡」

満 mama eršeheo

訳 疱瘡が発疹したか

漢 〈出過花兒了麼〉

蒙 cece gar=bao

カルムイク・オイラート方言の語彙には、[tsetsəç öwtšn] : pocken 「疱瘡」(Ramstedt [1935: 428]) とあり、Krueger (1984:624) には、ceceq : flower 「花」のほかに cece : flower 「花」とある。よって、カルムイク・オイラート方言の「花」、または「疱瘡」を意味する単語には、ceceq と cece の二つの語形があることがわかる。

cece の対応している満洲語と漢語の意味は「疱瘡」であり、その語形からカルムイク・オイラート方言の cece 「疱瘡」に対応した表記とみなすことができる。gar=bao は、「出たか」の意。

モンゴル文語には čečeg ebedčün 〈天花, 痘疮〉「疱瘡」(《蒙汉词典》[1999:1243]) とあり、『初学指南』の cecek はそれに対応した表記である。『蒙古翻訳一百条』には yeke jerge subila=bau 「疱瘡が発疹したか」とあり、『五体清文鑑』[1957:2.2267-3] の満洲語 mama eršemi 「疱瘡が発疹する」に対応しているモンゴル語 yeke jerge subilamui と一致している。

(10) hūrgon (297a2) : M quruγu 「指」. S hūru 「指」

満 galai simhun beberefi

訳 手の指がかじかんで

漢 〈手指都凍拘攣了〉

蒙 gar+iyeu hūrgon bere=ji

モンゴル文語の quruγu [xuru:] 〈指〉「指」(《蒙汉词典》[1999:688]) に対応しているオイラート方言の語形は xurγun [xurɣun] (确精扎布・格日勒图 [1998:108]) であり、『三合語録』の hūrgon の語形はそれと一致するものと見られる。

『初学指南』には、hūru 「指」とあり、モンゴル文語の発音表記 [xuru:] に対応していると考えられる。

3.3. 語形がモンゴル文語にない語彙

(1) mur bol=ji (35b3) : M jabsiyan-dur 「運よく」. S jol bol=ji 「運がよく」

満 jabšan de herebure be boljoci ojorakū

訳 運よく手に入るかもしれない

漢 〈萬一僥倖撈着也定不得〉

蒙 mur bol=ji ol=hū ni magat ugei

『三合語録』の mur と bol=ji の語形は、それぞれモンゴル文語の mör 「跡;列」と bol=ju 「なって」に対応するが、複合語としてモンゴル文語に存在しない。それに対して、オイラート方言の語彙には、mör bolxudān 〈幸亏、多亏〉「幸いにも」(烏恩奇・艾仁才 [2005:175]) とあり、『三合語録』の mur bol=ji は、これに対応した表記と考えられる。

『初学指南』には、jol bol=ji 「運がよく」とあり、モンゴル文語の jol bolqu (《蒙汉词典》[1999:1355] 〈走运、碰运气〉) 「運がよく、運しだい」に対応した表記になっている。

(2) tarlang-du uda bol=san(46b1) : M önggere=gsen-ü qoyin_a 「亡くなった後」.

S tariyalang-du eodebulsen [!]

満 akū oho manggi

訳 亡くなった後

漢 〈百年之後〉

蒙 tarlang-du uda bol=san hoinu

オイラート方言の語彙には、tarālang[tara:lan] 〈天堂〉「天国」(烏恩奇・艾仁才 [2005: 43]) とあり、『三合語録』の tarlang-du は、これに対応した表記と見られる。

214])とあり、tarlangはそれに対応した表記と考えられる。また、オイラート方言の語彙には、ödö bolxu[$\phi:d$ bɔlx]〈去世, 逝世〉「亡くなる」(同 [2005: 49])とあり、uda bol=sanもこれに対応した表記と見られる。即ち、tarlang-du uda bol=sanは「亡くなった」という意味をもつオイラート方言の熟語の満洲文字表記である。

『初学指南』には tariyalang-du eodebulsenとある。この中で、tariyalangは、モンゴル文語 tariyalang〈农业、庄稼；耕地、农田...〉「畑」(《蒙汉词典》[1999: 1024])に対応した表記と見られるが、文脈に合わない。一方、eodebulsenは、意味不明な表記になっている。『三合語録』のモンゴル語との対応、また文脈から、これらはいずれもオイラート語 tarālang-du ödö bolsanの誤記であると考えられる(注11)。

『蒙古翻譯一百条』のモンゴル文語では、önggere=gsen-ü qoyin_a「亡くなった後」が対応している。

(3) teon+esu naru(62a2) : *M* jiči「また」. *S* teoneser [!]
「また」

満 jai fafun šajin geli umesi cira
訳 また禁令も甚だ厳しい
漢 〈再王法又狠緊〉
蒙 teon+esu naru caji šajin yeke cingga

オイラート方言の語彙には、nāru [na:r]〈往这儿、在...以前、...以内〉「この方」(乌恩奇・艾仁才 [2005: 64])とあり、naruはそのオイラート文語の表記に対応している。また、奪格語尾+esuもオイラート文語に特徴的な奪格語尾+esüに対応している。したがって、『三合語録』のteon+esu naru「また」はオイラート方言の複合語であるとみなすことができる。

『初学指南』の teoneserは、対応している漢語〈而且〉の意味から「また」と推定されるが、その語形が不明である。これはおそらくオイラート文語を満洲文字で表記する際に生じた誤記であろう。

(4) sojok(154a3) : *M* sösü「胆囊」. *S* susu「胆囊」

満 niyaman silhi
訳 心臓と胆囊
漢 〈心膽〉
蒙 jurege sojok

カルムイク・オイラート方言の語彙には、[soz°g] zwerchfell「横隔膜」(Ramstedt [1935: 333])とあり、語形と文脈によって、sojokはそれに対応した表記とみられる。

『三合語録』では、満洲語の niyaman silhiをそのまま「心臓と胆囊」と訳したのでなく、

jurege sojok「心臓と横隔膜」というオイラート方言の複合語によって意識したものと考えられる。

『蒙古翻譯一百条』のモンゴル文語には sösü「胆囊」とあり、『初学指南』の susuは、それに対応した表記になっている。

(5) nam sim(240a1) : *M* jüg-iyer「静かに」. *S* nam sam「静かに」

満 ekisaka macihi jafara nomon hūlara
訳 静かに座禅をして経書を読む
漢 〈靜靜的持齋念經〉
蒙 nam sim macak bari=hū nom ongsi=hū

オイラート方言の語彙には、nam šim[nam jim]〈静悄悄〉「静かな」(乌恩奇・艾仁才 [2005: 66])という複合語があり、nam simはそれに対応している表記と考えられる。

『初学指南』では、モンゴル文語にみる nam sam「静かに」が対応している。『蒙古翻譯一百条』には、jüg-iyer「静かに」とあり、『五体清文鑑』[1957: 2.1865-1]における満洲語 ekisaka「静かな」のモンゴル語訳 jüg-tegenとほぼ一致している。

(6) kunolde=ne(245b2) : *M* dariyul=jū「酒を勧め」. *S* kundule=ne「尊敬する」

満 si minde darabure. bi sinde bederebure
訳 あなたは私に酒を勧めたり、私はあなたに返杯したり
漢 〈你給我斟酒 我給你回鐘〉
蒙 ene tun+du kunolde=ne. tere on+du! hariol=nai

カルムイク・オイラート方言には、[kü:nld°xə, kü:nlts°xə] sprechen, sich unterhalten, mit jmdm plaudern「話をする」(Ramstedt [1935: 250])、[ky:ndek]〈交谈, 商谈〉「話し合う、ことばを交わす」(乌恩奇・艾仁才 [2005: 120])という語彙があり、『三合語録』の kunolde=neはそれに対応している表記と見られる。

満洲語の darabureの意味は「酒を勧める」、また漢語〈斟酒〉の意味は「酒をつく」であり、一見していずれもモンゴル語の意味と合致していない。しかし、なぜモンゴル語訳は「話をする、ことばを交わす」という意味をもつ kunolde=neを用いたのか。

ここで、モンゴル語訳では「酒を勧める」行為の「勧める」という意味だけを取って訳した可能性がある。また、満洲語の bederebureや、漢語の〈回鐘〉に対応しているモンゴル語の hariol=naiには「返杯する」、または「答える」との両方の意味がある。つまり、「答える」という意味では kunolde=ne「ことばを交わす」と都合よく対応している。

『初学指南』には、kundule=neとあり、モンゴル文語の kündülen_e「尊敬する」に対応した表

記になっている。『蒙古翻訳一百条』には、dariγul=ju とあり、《五体清文鑑》[1957:1.629-3] における満洲語 darabumbi 「酒を勧める」のモンゴル語訳 dariγulumui と一致している。

(7) oo(276a1) : S aodam 「広い」

満 dobori oho manggi. ele se selaha

訳 夜になった後、ますます大いに快とした

漢 〈到夜晚上 更暢快了〉

蒙 suni-du kur=sen hoina. neng oo aklaga bol=ji

カルムイク・オイラート方言には、[u:] weit, breit ; gross, geräumig 「広い」(Ramstedt [1935:453]) とあり、烏恩奇、齊・艾仁才 [2005:40] にも、uu[ɯ:] 〈宽敞〉「広い」とある。『三合語録』の oo は、これに対応している表記と見られる。

一方、『蒙古翻訳一百条』には、masi amarabai 「大いに快とした」とあり、満洲語 se selaha の直訳になっている。それに対して、『三合語録』のモンゴル語訳は、人の心情を表した満洲語の se selaha をそのまま直訳したのではなく、「広くて物静かになった」夜の風景を描写したと考えられる。

『初学指南』では、モンゴル文語の aodam 「広い」に対応した表記になっている。

(8) kulbu=ser(288b1) : M körbü=gseger 「のたうって」. S kurbu=ser 「のたうって」

満 kurbušehei tanggū ging tulitele amu isinjirakū

訳 寝返りを打っていて明けの鐘が過ぎるまで眠りにつかない

漢 〈翻來覆去過了亮鍾困仍不來〉

蒙 kulbu=ser colmun gar=tala okto noir ugei

オイラート方言の語彙には、kölbēdekü [kɔɮwæ:dek] 〈打滾、翻筋斗〉「のたうつ」(烏恩奇、齊・艾仁才 [2005:118]) とあり、kulbu=ser はそれに対応した表記と考えられる。この例文のモンゴル語の意は、「寝返りを打っていて明けの明星が出るまで眠りにつかない」である。

『初学指南』のモンゴル語には kurbuser とあり、モンゴル文語の körbügseger [xorbosor] 〈打滾〉「のたうつ」(《蒙汉词典》[1999:717]) の発音に対応している表記と見られる。『蒙古翻訳一百条』では、körbügseger 「のたうって」が対応している。

(9) ashon(291b3) : M üdesi 「晩」. S udesi 「晩」

満 yamjitala hungkereme agahai

訳 晩まで盆を傾けたように雨が降っていて

漢 〈直傾到晩〉

蒙 ashon bol=tolo cuthū=sun bol=ot

オイラート方言の語彙には、asxun[asxan] 〈傍晩、昨晩〉「晩」(烏恩奇・艾仁才 [2005:13]) とあり、『三合語録』の ashon は、そのオイラート文語の表記に対応している。

『蒙古翻訳一百条』のモンゴル文語には üdesi 「晩」とあり、『初学指南』の udesi はモンゴル文語に対応した満洲文字表記と見られる。

(10) ürun(296b1) : M örlüge 「朝」. S eokle 「朝」

満 ecimari ebsi jidere de

訳 今朝ここへ来る時に

漢 〈今日早往這們來時〉

蒙 ürun naš+an ire=ku+den

オイラート方言の語彙には、örüün [ɕry:n] 〈早晨、清晨〉「朝」(烏恩奇・艾仁才 [2005:54]) とあり、『三合語録』の ürun は、それに対応した満洲文字表記と見られる。

『初学指南』には eokle とあり、モンゴル文語 örlüge[oglo:] 〈早晨〉「朝」(《蒙汉词典》[1999:296]) の発音に対応した表記になっている。『蒙古翻訳一百条』には örlüge 「朝」とある。

4. おわりに

『三合語録』のモンゴル語の言語的特徴を明らかにする上で、「トド文字一百条」の存在は極めて重要な役割を占めている。上に述べたように、「トド文字一百条」のオイラート文語の特徴が確認され、テキスト間の比較による両者の対応が明らかになってからはじめて、『三合語録』のモンゴル語はオイラート文語である事実が窺われた。しかし、『三合語録』のモンゴル語は、全 102 話からなっており、「トド文字一百条」のオイラート文語と対応しているのは、その最初の 7 話にすぎない。テキストの全体的な特徴を究明するには、第 8 話以降の部分を考察し、その表記、文法、語彙といった言語的特徴が最初の 7 話と一致しているかどうかを検討する必要がある。

これに対して、本稿では、『三合語録』の全 102 話のモンゴル語から語形と意味がモンゴル文語と異なる 30 語(語句)を取り上げ、それらはオイラート方言の語彙であることを明らかにした。『三合語録』のモンゴル語の言語的特徴の一つである語彙的特徴は、オイラート方言に特徴的な語彙が多く含まれていることであり、これもまた最初の 7 話だけでなく、全巻にわたって一貫している。語彙の面からみると、『三合語録』のモンゴル語は、「トド文字一百条」に対応している部分に限らず、その全文がオイラート文語の満洲文字表記であると推定され、19 世紀初頭のオ

イラート文語とオイラート口語方言の研究における貴重な資料と位置付けることができる。

ここで、注目に値するのは、これらの語彙と『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の対応である。まず、「3.2. 語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙」と「3.3. 語形がモンゴル文語にならない語彙」で検討した 20 語において、両者のモンゴル語の表記がすべて異なっている。つまり、『三合語録』のモンゴル語における明らかにモンゴル文語と異なる語形とモンゴル文語にない語形をもつ語彙に対して、『初学指南』のモンゴル語ではほとんどモンゴル文語、または《蒙汉语典》[1999]に載っているモンゴル文語の発音表記に近い表記が対応している。ここから、『三合語録』ではイラート文語をそのまま満洲文字で表記したが、『初学指南』では満洲文字で表記する際にその特徴的な部分を書き換えたとみなすことができる。両者の対応は『三合語録』の語彙がイラート文語やイラート方言に特徴的なものであることを裏付けると同時に、『初学指南』のモンゴル語の口語の特徴がモンゴル文語の発音（現在の内モンゴルの標準語の発音）に近いものであった可能性が窺われる。

次に、「3.1. 語形がモンゴル文語にあるものの意味が異なる語彙」にみる 10 語のうち、sineken(231b2) ~ S sai「たった今」という 1 例を除いて両者の表記がほぼ一致している。なぜ「3.2.」と「3.3.」において両者の表記がほとんどすべて異なっているが、「3.1.」では一致しているのか。「3.2.」と「3.3.」における語彙のイラート方言の特徴が明白であるが、「3.1.」の語彙において語形がモンゴル文語にも存在するため、語形だけでそれらはイラート方言の語彙であることが分かり難い。そして、『初学指南』ではその文脈の細部に至らず、そのまま満洲文字で表記したために、『三合語録』のモンゴル語の表記と一致したと考えられる。一方、上掲の 1 例は、文脈上の意味がモンゴル文語とかけ離れているため、『初学指南』では別の表現に置き換えたと思われる。

勿論、本稿で挙げたのは本テキストにおけるすべてのイラート方言に特徴的な語彙ではなく、その中の典型的な例を示したものである。一方、『三合語録』のモンゴル語には、満洲語や漢語との対応からその意味が推定されるが、語形や表現が不明な一部の語彙がある。例えば、edebuljilsen(25a1)「招いて来た」、yeke noroo(174b3)「おおよそ」、belen jelen belge=ji(294a3)「準備がすっかりでき上がって」など。これらは、翻訳する際に生じた誤訳や書き写す際に生じた誤写、或いは原文の直訳や満洲語の綴りの影響を受けた可能性がある一方、当時のイラート文語における特定の意味を持つ方言の語彙であるとも考えられ、さらに多くの資料や調査によって考察する必要がある。

注

- (1) 『tanggū meyen (一百条)』の書誌情報、内容、体裁について、浦・伊東 [1957] に詳しい。また、その 4 種類のモンゴル語訳の詳細については、栗林・斯欽巴図 [2009a, 2009b] を参照されたい。『蒙古托忒彙集』について春花 [2006] の論考がある。
- (2) 富俊 (1749 ~ 1834) と、德勒克 (? ~ 1794) については、栗林・斯欽巴図 [2009b] の「注 1」と「注 6」を参

照されたい。

- (3) 富俊による「序」には、「迨後仰蒙聖恩特開繙譯鄉會科場，時有教讀學館。而蒙古繙譯，與蒙古語言又不相同。因照智公百條清語譯出蒙文質之，御前行走正紅旗滿洲副都統巴林輔國公額駙德勒克條條按蒙古土語改正（後に皇帝のご恩により翻訳郷会科挙制度ができ、教える学校が増えた。モンゴル語の翻訳と口語は同じでないことから、智信の清語百条を満洲語の文のままにモンゴル語に訳し、御前行走正紅旗滿洲副都統巴林輔國公額駙德勒克にモンゴル口語の発音に直させた）」とある。
- (4) 栗林・斯欽巴図 [2010 : 189-190] を参照されたい。村上 [2002 : 69] に「満洲翻訳科挙の応募者は漢文の古典を満文に翻訳するのに対し、蒙古翻訳科挙の応募者は満文に訳された古典をモンゴル語に翻訳する必要があった」とあるように、蒙古翻訳科挙を受験するものは満洲語に堪能でなければならない。
- (5) 小沢 [1979 : 24]、栗林 [1992 : 525] などに指摘されている。
- (6) 『初学指南』の表紙には「蒙古語多由口授内地殊難其人因輯是編以便初学（モンゴル語は多くの場合口頭で教えられるが、内地では特に教える人が得難い。そこで初めて学ぶ人のためにこの本を編集した）」と、内地のモンゴル人に口語を教えるために編纂されたことが記されている。『三合語録』と『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語の内容、体裁、形式、語順が全く同じであるにもかかわらず、語尾や語彙の異同が目立つ。両者の語尾や語彙の異同を明らかにすれば、それらの口語、方言の要素を把握することが可能である。
- (7) 『三合語録』のモンゴル語の表記は <ɣtam となっているが、満洲文字表記 <ɣdam における補助記号 (<d> の右傍らの点) が脱落したものと考えられる。
- (8) <ɣ> は、母音字の前で点のない <ɣ> を示す。
- (9) 『蒙古語大辞典』における転写は gai da haragagsan hūmūn である。
- (10) 烏恩奇・艾仁才 [2005] におけるトド文字の母音字 <ø> [Ø] に対応している音声記号はすべて [ϕ] になっているが、引用する際にそのまま表記した。
- (11) この事例は、栗林・斯欽巴図 [2009b : 12] において、『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語は、それぞれ「トド文字一百条」に基づいて制作された依存関係の手がかりとして挙げられている。

引用文献

<欧文>

- Котвичь,Вл.
1905 *Калмыцкия Загадки и Пословицы*, Санктпетербургь.
- Krueger, John R.
1978-1984 *Materials for an Oirat-Mongolian to English Citation Dictionary*, The Mongolian Society, Part One(1978); Part Two(1984); Part Three(1984).
- Möllendorff, P.G.von.
1892 *A Manchu Grammar, with Analyzed Texts*, American Presbyterian Mission Press. .
- Ramstedt, G.J.
1935 *Kalmückisches Wörterbuch*, Suomalais-Ugrilainen Seura, Helsinki.

<日本語>

- 浦廉一・伊東隆夫
1957 「TANGGŪ MEYEN (清話百条) の研究」『広島大学文学部紀要』12 : 75-277。
- 小沢重男
1979 『中世蒙古語諸形態の研究』東京：開明書院。
- 栗林均
1992 「モンゴル諸語」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編』下 -2 : 517-526。
- 栗林均・斯欽巴図
2009a 「『tanggū meyen (一百条)』のイラート文語訳について」『東北アジア研究』13 : 127-168。
- 2009b 「『初学指南』と『三合語録』におけるモンゴル語の特徴——満洲文字表記モンゴル語会話学習書の口語的特徴——」『日本モンゴル学会紀要』39 : 5-17。

- 2010 「「トド文字一百条」と『三合語録』のモンゴル語の対応」『東北アジア研究』14：189-225。
栗林均・呼日勒巴特尔 編
- 2006 「『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』モンゴル語配列対照語彙」仙台：東北大学
東北アジア研究センター。
- 斯欽巴因
- 2010 「『三合語録』のモンゴル語の研究」博士学位論文（未公刊）。
- 斯欽巴因・栗林均
- 2008 「『三合語録』におけるモンゴル語の言語的特徴について——満洲文字表記モンゴル語会話学習書の口語的特徴——」2008年度日本モンゴル学会春季大会研究発表。
- 田村實造・今西春秋・佐藤長 編
- 1966-1968 『五體清文鑑譯解』京都：京都大学文学部内陸アジア研究所。
- 村上信明
- 2002 「乾隆朝の繙訳科挙と蒙古旗人官僚の台頭」『社会文化史学』43：63-80。

<中国語>

- 春花
- 2006 「论《蒙古托忒汇集》的语言学价值」《卫拉特研究》1：62-70。
- 李桓
- 1966 『國朝耆獻類徵初編』台北：明文書局。
- 錢儀吉
- 1893 《續碑傳集》江蘇書局校刊。
- 王鍾翰 點校
- 1928 《清史列傳》上海：中華書局。
- 趙爾巽 等撰
- 1997 《清史稿》北京：中華書局。

<モンゴル語>

- 八省区蒙古语文工作协作小组《蒙文和托忒蒙文》编写组 编
- 1976 《蒙文和托忒蒙文》乌鲁木齐：新疆人民出版社。
- 白音门德
- 2010 《蒙古语方言特殊词汇及其研究》呼和浩特：内蒙古大学出版社。
- Я. Цэвэл*
- 1966 *Монгол хэлний товч тайлбар толь*. Улаанбаатар.
- 故宫博物院（藏）
- 1957 《五体清文鑑》北京：民族出版社
- 加・伦图
- 1994 《卫拉特方言词汇汇编》呼和浩特：内蒙古大学出版社。
- 2003 《卫拉特方言与托忒蒙文》乌鲁木齐：新疆人民出版社。
- Г. Лувсанжав, Г. Шархүү
- 1968 *Манж Монгол Толь*. Улаанбаатар.
- Х. Лувсанбалдан
- 1975 *Тод үсэг, түүний дурсгалууд*. БНМАУ Шинжлэх ухааны Академи Хэл зохиолын хүрээлэн.
- 《蒙古语辞典》编纂组
- 1997 《蒙古语辞典》呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 特・那木吉勒
- 2009 〈卫拉特蒙古传说概况〉《内蒙古大学学报》1：26-39。
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所编写
- 1999 《蒙汉词典（增订本）》呼和浩特：内蒙古大学出版社。
- 清格尔泰
- 1999 《现代蒙古语语法》呼和浩特：内蒙古人民出版社。

- 确精扎布
- 2008 《确精扎布论文选集》呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 确精扎布・格日勒图编
- 1998 《卫拉特方言词汇》呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 陸軍省 編
- 1933 『蒙古語大辞典』東京：国書刊行会。
- O. Санбордолж・橋本勝
- 2005 『オイラト・モンゴル文語概説（*Тод монгол үсгийн бичгийн хэлний тойм*）』大阪：
大阪外国語大学
- 斯琴巴特尔 主编
- 2005 《蒙古语方言学概论》呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 斯钦朝克图
- 1988 《蒙古语词根词典》呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 苏雅拉
- 2009 「卫拉特方言有关婚姻习俗词的文化内涵」《内蒙古大学学报》1：49-58。
- 孙竹 主编
- 1990 《蒙古语族语言词典》西宁：青海人民出版社。
- 乌恩奇・艾仁才 主编
- 2005 《四体卫拉特方言鉴》乌鲁木齐：新疆人民出版社。